

体育部会

<県研究主題>

心と体を一体としてとらえ、児童一人ひとりが生涯にわたって自らの健康・体力づくりを考えて行動する資質や能力の基礎を培う学習指導と評価の工夫・改善

提案1

提案者 中村 宏・寺谷 亘(横浜地区)

<研究主題>

「体育科、保健体育科におけるカリキュラムマネジメントの充実」
指導と評価の一体化を図る授業実践
～体育科・保健体育科における「しっかり教え、しっかり引き出す指導」の実際～

1 提案内容

「第5学年 体づくり運動／体力を高める運動 【体力アップ大作戦】」

- ・横浜版学習指導要領をベースにした年間カリキュラムを各校が作成しているが、「新体力テスト」「指導内容」「子どもの姿」「地域の特色」等、より細かな実態の把握からカリキュラムの改善の必要性がある。

(1) カリキュラムの改善

①2学年の指導内容の明確化

5学年、6学年の指導内容をそれぞれの学年ごとに明確化し、より良い指導を目指す。

②オリエンテーション

5学年、6学年それぞれでおさえるべき学習内容を確認する。

③重点の置き方

「柔らかさ・巧みな動き」にやや重点を置く。→17時間中10時間

④第5学年における運動の精選

各校の実態に合わせて運動を選んでいく。

A校「長縄」、B校「バンブーダンス」、共通の運動「ステップ走」

→2つの運動に絞って実践することで効果的な学び方につながる。

⑤選択と行い方の工夫

第5学年で「運動の選択」を行い、第6学年で「運動の行い方の工夫」という2学年での学習を実践していく。

⑥時期

長期休みや学校・地域行事とのつながりを意識する。→運動の日常化を図る。

学校の様々な場面を意識する。→体力を高めようとする力を培う。

(2) 指導と評価の実際

- ・実感を伴った理解（体力の高め方に対する理解）のために、運動前・運動中・運動後それぞれにおいて、ねらいを意識して正しく動くことが大切である。

「柔らかさを高めるための運動：各部位の可動範囲を広げること」

第5学年「徒手体操（動的）」、第5学年・第6学年「ストレッチング（静的）」

- ・ A校、B校それぞれの実態を捉え、それぞれに適した指導を実践していく。
- ・ 正しい動き（安全で効果がある動き）を評価していく。
→観察・発言・学習カードにおける見取り。
- ・ 正しい動きのために教師の効果的な言葉かけ、友達同士の見合いが大切になる。
徒手体操の正しい動き→ラジオ体操の動きに生かされていく。

2 協議内容

- ・ 2学年での横断的な指導をするためには、学校全体としての共通意識が大切になる。
- ・ 運動が苦手な児童に対して、ねらいを強く意識させる授業実践が大切になる。そのために「児童の言葉を取り上げる」「自分の思考を大切にさせる」ことを意識していった。
- ・ ラジオ体操の楽しさを味わわせるために、伸び（効果）の実感を大切にさせていった。
- ・ 動きを絞って学習していくことで、運動の日常化につなげていきやすかったり、学び方を深めたりすることができる。

3 指導助言

- ・ 大人になって行う運動のほとんどが体づくり運動である。そのため、体づくり運動のねらいを明確にして指導することは重要なことである。
- ・ カリキュラム改善のためには、それぞれの学校の実態に合った運動を選んでいくことや他領域・行事とのつながりを意識していくことが大切である。
- ・ 教材の使いやすさ、取り組みやすさについても、その運動を学校として継続的に取り組んでいくためには考慮すべき点である。
- ・ ラジオ体操や徒手体操の楽しさの捉えは、その運動をどのように価値付け（ねらいを明確化）し、日常の実践とのつながりを理解させていくのが大切である。

提案 2

提案者 白幡 浩一（県央地区）

<研究主題>

一人ひとりが自らの健康を考え、習得した知識を活用する学習指導と評価の工夫

1 提案内容

「第6学年 病気の予防・飲酒と喫煙」

学習の中でただ知識を理解するだけでは、児童が現在の日常生活で経験することのできない健康課題に対して、自らの問題として考え、行動する力を身に付けることができるとは考えにくい。そこで、ただ知識を覚えさせるだけではなく、生活の中に生きる知識を児童目線で興味深く習得させる指導の工夫をした。そして、その知識をもとに、自らの健康問題について考え、そこから健康を管理し、改善していく資質や能力、つまり「実践力」を育成することにつながると考えた。

(1) 事前アンケートの活用

効果的な指導を行うために、児童の健康に関する知識や健康な生活の実践状況を的確に把握して、ねらいを明確にし、指導内容を精選していった。

(2) ICT 機器の活用

飲酒による、健康への影響を興味深く、また効果的に理解させるために ICT 機器（電子黒板・拡大投影機）を用いて児童に写真等を提示した。

(3) アルコールパッチテスト

児童一人ひとりが、自分の体質について知り、アルコールが体に及ぼす影響についてより理解を深められるようにした。

(4) ワークシートの活用

児童一人ひとりに知識・理解と思考・判断の2つに分けて学習の振り返りを書かせる活動を取り入れることで、内面化を図った。

2 協議内容

- ・アンケート調査は事前しか実施していなかった。ワークシートの記述や発言等から児童の変容は見られたが、アンケート調査を事後も実施していれば、児童の変容がもっと具体的にわかったのではないか。
- ・「飲酒と健康」に重点をおいて指導したのは、喫煙に対しては体に悪いなどの理由から抵抗感がある児童が多かったが、飲酒に対しては、体への影響などがあやふやであったため重点的に指導をしていくこととした。
- ・知識の習得から活用に移すには、どのような指導方法が有効的であろうか。
今回は、すぐに活用することは難しいため、メリットやデメリットをしっかりと理解できていればよいのではないか。
- ・未成年に酒やたばこが禁止されていることを、どのようにおさえていったのか。
体への影響から法律で禁止されていることを、教師主導でおさえていったが、児童へ問いかけるなどして考える場面があれば、さらに理解が深まったのではないか。
- ・養護教諭や家庭との連携はどのようにとっているのか。

3 指導助言

- ・健康に対して学校と家庭との考え方が違う、または家庭と家庭との考え方が違う中で、学校の学習としてどのようなことを行っているのかの情報提供が必要となってくる。日常的に情報提供を行っていくことで、家庭からの協力を得られることもある。
- ・内容によっては、教師が主導で説明していいのではないか。きちんと理解させたいことは教師がしっかりと教える必要がある。全てを子ども主体にしてしまつては時間がかかりすぎてしまう。何を子どもに学ばせたいかをよく考えて指導にあたる必要がある。
- ・喫煙と飲酒は、中学校でも学習する内容なので、小・中学校それぞれで、何を中心に学ばせたいかを明確にすることが大切なのではないか。
- ・心の健康や心と体の変化を重視していく中で、学習の中に具体的な場を設定し、そこから子どもに感じさせたり、考えさせたりしていくことが大切である。また、心や体の変化は個人差があって当たり前ということも重視し、子どもたちが個人の違いを肯定的にとらえていけるように指導していく必要がある。

班別協議

〈協議の柱〉

学習した内容を実生活に生かすことを目指した指導と評価の工夫

- ・例えば、水泳カードや縄跳びカード、持久走カードなどを活用し、夏休みや休み時間、放課後などでも楽しく取り組めるような工夫があるといい。もっと運動をやりたいなど思ってもらえるような、ちょっとした工夫が大切。
- ・川崎市ではラジオ体操ではないが独自のDVDを作成。小田原では老若男女が取り組めるようなDVDを作成。
- ・体育で学習したことが休み時間や放課後にも活かせるように、休み時間や放課後にも、体育で学習した運動をできる環境を作ってあげる。例えば、バスケットボールの貸し出しや、走り幅跳びのための砂場の整備など。
- ・学校行事を有効活用し、それに対する体づくりを学校全体で行っていく。
- ・教師にも、遊びや運動に対する研修があるといいのではないかな。
- ・どのようなことを指導し、どこで何を評価していくのか、計画をしっかりと立てた上で指導を行っていかなければならない。
- ・休み時間や放課後の遊びや運動に対する児童の実態から、体育の授業を構成していくことも考えられる。
- ・体育の授業で運動が苦手な子が好きになるように、競技性だけではなく、運動や動きの楽しさを重視した授業づくりが大切なのではないかな。
- ・学校と家庭や地域との連携を図り、協力しながら指導にあたっていく。理解と協力を得ることは非常に大切。
- ・体育の授業を充実させるために、教材教具の充実が必要。
- ・保健は実生活につなげやすい。だからこそ、そこを意識して指導していくことが重要。

まとめ

(1) 運動領域

- ・学習指導要領の趣旨に基づいた授業作りを行う。①運動の楽しさを追求 ②指導内容の明確化 ③個に応じた指導の充実 ④言語活動の充実
- ・年間指導計画・単元計画を作成する。①2年間のまとまりと系統性の明確化 ②指導と評価の明確化
- ・運動領域と保健領域、または他教科等の関連を意識して指導していく。
- ・文部科学省から配布されている各種資料を積極的に活用していく。
- ・体力向上について総合的な取り組みを行っていく必要がある。

(2) 保健領域

- ・小学校における保健教育の重要性を認識し、実践を推進していかなければならない。
- ・運動領域との関連を図った指導をしていくことが必要である。
- ・児童の発達の段階を踏まえた指導をしていくことが必要である。